

---

# 有り得ない世界にわたし

kiiro

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

有り得ない世界にわたし

### 【Zコード】

Z9203Z

### 【作者名】

kiirō

### 【あらすじ】

知らないけど、マフィアの娘に。

とりあえず、一生懸命に生きる事を目標に毎日を過ごします。  
なぜ、どうして異世界に来たのかはわからないけど  
、幸せに成るために頑張ってるうちに色々勘違いされて、話が大きくなつてきちゃった話。

## お嬢様について その一（前書き）

色々不慣れで間違いもこいつぱいでしょ！が、許してくだせー。

沢山、言いたい事いっぱいでも、優しく見守ってください。

完走出来るようにがんばります。

## お嬢様について その1

とつあえず、今日も地道に地味にこえる事を田畠に頑張りつー！

自室のベッドの上で決意表明をしていた。

この世界に生きる事になつてからの習慣。

「お嬢様、朝食の準備が整いました」

格。

彼は、わたしの従者。

わたしの面倒を幼き頃から見てもらっています。

きっと、嫌がられてはいないと思いたい。

「ありがとうございます。」

高そうなカップにお湯を注ぎ込みながら、彼は一口ひと口元を上げた。

「本日は、ファミリーの皆様方ご集合の御命令が、お嬢様もと田畠様があつしゃつておりました。」

「そう、わかりました。参ります。」

わたしはそう答えるながら、面の厚くなつた顔を笑顔に変えた。  
何が起きても驚くなんて顔は、表に出さないでいられる自信がある。  
だって、それくらいしか私には武器がない。

こんな変な世界に対応出来るわけない！？

ない！？

だって、だって、だって、

マフィアのドンの娘つて何！？

お嬢様について その一（後書き）

完走出来るようになります。よろしくお願いします！

## お嬢様について その2

私が初めて従者としてお勤めする事になったのは、12歳。父に連れられ、バレルファミリーの本部にやってきた。今から15年前だ。

バレル島を本部としている為、そう言われているバレルファミリーは、この世界で5本の指に入る大きなマフィアだ。

バレルファミリーのドンには、3人の娘がいる。

長女、イノリさま。

二女、ミノアさま。

三女、ヒノヒさま。

3人のうち、末のヒノヒさまは、奥様が違う方からお生まれになつている。

わたしは、三女ヒノヒさまの従者として推举された。お嬢様、当時2歳。

ヒノヒさまの従者になるに辺り、マフィアとして力のあるもので、年も近きものではなくてはならないと強く、ドンヒドンナに言われた。

父は、ドンの幹部を務めていた。

2歳と12歳。

近くはないと思うが、私が従者になつた。

ドンの奥様は、金髪波うつ背の高い美人だ。

ヒノエさまは、黒髪で黒眼。腰程にある髪は、艶やかであるが、真っすぐ伸びている。

背も190センチほどある私から見るとかなり低い。

先日、145センチほどであると、専属の医師が言つていた。

当然、3人のうちでも一番低い。

イノリさまは、171センチ。  
ミノアさまは、177センチ。

可愛らしいお顔に小さい背。

御本人は気にしているらしく、お食事は何時も魚をメインにして、マルクをお飲みになる。

マフィアの娘だが、好戦的で派手な上の2人に対し、温和しめな方だ。慈悲深い方であり、血生臭い事を嫌うため、マフィアの役目は少々酷ではないかと思つた。

14年前

「ひーーうわ、おじちゃん倒れてる。たしゅけて。」

侵入した賊を見てそつお嬢様はおしゃって、慌てて私の方に向かって走つて來た。

そいつは、今お嬢様の運転手兼護衛をしている渡だ。

11年前

「終、倒れてた。ビリーハー。」

雨の日、畳具を羽織つていたお嬢様は、一生懸命走つて来て私を呼んだ。

それらは、現在お嬢様のペット兼友人となつてゐる、フォボスにデイモスだ。

因みに鷹である。

お嬢様は、マフィアのボスの娘である。

## お嬢様について その3

あの日は、月の光の入らない日だった。

ワシが、このバレルファミリーの仲間入りしてから、かれこれ14年経過していた。

食つものに困り、訳の分からぬ奴等にファミリーに侵入して来いと言われたことがきっかけだった。

とりあえず、食べ物にはありつけたが、囮だったワシは、敷地内で力尽きた。

死ぬのもイイと思った。そうすれば、すべてが終わると思ったからだ。  
妻や息子は、事故でなくし田標を失っていたワシには一度よかつたのだ。

田を覚ますと、小さな手が見えた。

「だいじょーぶ、おじちゃん」

黒髪、黒眼の幼子だ。

「ああ」

「よかつた

「だれだ、おまえつ…痛つ~」

「お嬢様です。そのような口は慎んで頂けますか」

幼子の後ろに控えていた、黒服の子供<sup>2</sup>はそう言つてワシを殴つたのだ。

その時、はじめて綺麗なベッドに寝かされていて話を呟つた。

「おじひきさん、行くとこないの?」

「行くとこへ?」

「うそ、ひいいろがいった。」

「えつ、ああ、、気にするな、お嬢様」

「えつとね、じあね、ここで動けば」

「は?」「ええ??」

「さうだ、今日からわたりね、名前はわたり。」

「渡、おはよー」

あの頃よつ少し成長したヒノヒお嬢様が車の前に顔出した。

「おはよーひーじゃこます。今口せじけひへく」

扉を開けて車の中に乗車させる。

「渡。何でも臨集合なんだって…、わたし行つてどうするんだうねえ…はあ」

「ナヘンで」やこますね…」

「渡ーー！」

「はー、はー、わうだなあ…、ワシにもわからん。まあ、行つてから考えたらいひじや」

「うう…、そうするしかないんだね」

「ハハハハハハ」

雇われることになつてから、力のあるマフィアの末娘だと知つた。護衛をするに辺り、かなり身体を鍛えなおされた事が一番しんどか

つた。

ヒノエお嬢さんはワシのことを行ったのかよく様子を見に来ていた建前気は抜けんかった。

面白いお嬢さんで、ワシに名前を付け、新しい家族の一員とした。名づけるとま、マフィアの世界では、そういうことを意味するらしい。

一度無くしたものだつた命、それもよからうと感じた。

あれから14年、身長はあまり伸びんかったお嬢様は、ワシより20センチも低く、未だ子供のよつた容貌だ。よい家柄の娘としても少し変わっているが、よき娘に育つた。ワシも年をとつたということか…。

「渡は、イケメンだよね、だから…！」

ヒノエお嬢さんになぜワシを助けたか聞いた時、そういったキラキラした顔だったので聞けんかったが、一体あれはなんだっただか未だわからん。

ただ何か、大きな期待が含まれていたのは事実のよつたが…。期待してくれているのだから、答えねばならんがと結論付けた。

(イケメンなら、いづれダンディーになるかもしだいし、見てみたいじゃん )

(彫の深いイタリア系ダンディズム )

「イイ感じだよねえ、わたし凄い」

「お嬢さん?」

「ううん、一人言」

ヒノエお嬢さんは、マフィアの末娘だ。

## お嬢様について その4

私は、なぜこんなところでお嬢様をしているか？  
まだ、小さじころは今より真剣に考えていた。

(赤子つて話せないのが、玉に傷だわ)  
うつ伏せに、寝転がっていた私は、だだっ広い部屋にぽつんとしていた。

(この状況、どう見ても何か事情がある赤子なんだわ)  
立ち上がりつと試みるも失敗。

(一日に何度か訪れるメイドも色々だし、第一なんで私こんな赤子になつてんの)

2000年代の日本のオーランドで日々、仕事という荒波と格闘中だった、わたし。

ワーキングプアもいいところだった。

とりあえず、正社員にならなくてはと必死だ。  
仕事中、課の上司な何か言われてる内にフードアウト。  
気付いたら、ここにいて、赤子だった。

「失礼いたします」

「ああう～」「（なに～）」

「奥様、」（おひさまや）

「ああ～？」（えつ）

「「」の赤子が、ドンが外で作ったとこつ娘ですか」

「はい。直属の部下よりそう聞いております。東の国へ滞在中、遊郭という場所の遊び女が集う宿でまだお付きとして仕事をしていた女との間に出来たと聞いています。この赤子を産んでもぐくなつたそうです。不思議な女性だつたとおっしゃつておりました」

（えーーつ修羅場…）

「…もう、あの人男の子に間違いはないならよい。この赤子も育てよとの「」命令です」

「ですが、奥様」

「そのよつな」とせ、どうでもいいのです。わたくしの勤めを果たせば自由になれるはず、わたくしの勤めは、子を産みある程度まで育てる。それだけです。」

赤子ながらに、壮絶な家庭環境であることは理解した。  
(まさか、マフィアだとは、思わなかつたけど……)

その後、ダンとやけに会つたのは、奥様がやつてきてから8日後の  
ことだつた。

「ヒノH」

昼寝中起こされたわたしは不機嫌だつた。

「つかせやーう」「なんだよ、眠いんだ」

「以前より重くなつたか?」

「なー」(だれ、あんた)

「お前は、母である藤によく似てゐる。不思議と落ち着く女だつた  
が、変な力のせいであまり身体は丈夫ではなかつたな。お前にも受け  
継がれているのか……」

「はあ「つあ「あ」(何、ソレー.)

「大きくなれ」

やつぱり静かこの部屋を後にした。

(じつでもこにナビ、なんか彌深くてちょっと凄みのあるイケメン  
だった…、ここって全員イケメン仕様なのかな?)

やのあえさせ、2日後緊急といひがいつてきた時に間違つてこたことを嘆くことになる。

わたしは、イケてる感じのソーナの娘だった。

## お嬢様について その5

15年前

「カイル、お前は今日から格と名乗れ」

「はい」

私は、父にドンの別荘へ向かう途中そのよつに掲示された。

父は、幹部の中でもフ武神の中の一人だ。

バレルファミリーは、ドンを中心にフ武神がいた。

金の管理をする部署

島の警備を担当する部署

船の警備を担当する部署

武器を管理する部署

暗殺を担当する部署

外交を担当する部署

内部の監査を担当する部署

以上に分かれているすべてのトップのことを指す。

内部の監査を担当する部署のトップに立っていたのが父だ。  
バーン・アウディト。

不器用な父だが、仕事での信は厚い人だ。

「お前は、ドンの末娘ヒノエ様の従者だ。わたしの息子では無くないよ。よいな、励め」

「はい」

「失礼いたします」

そう言って入ってきたおつせんは馬鹿でっかくて、ついでに怒りしかった。  
顔が。

「ヒノエお嬢様だ。柊」

「……、柊です。よろしくお願ひいたします」

「あうー」（よろしくー）

次に入ってきた少年は、美形だった。  
青い眼に茶髪。

身長およそ165センチ

隣の厳しいおつせんは、2メートルを超えていそうな身長だ。  
顔が怖いを足して、2重苦。

（恐ろしい。この世界はイケメン仕様じゃなかったのか）

案内された別宅の最奥、そこがお嬢様の聖域でした。  
扉を開けて眼に入ったのは、小さな赤子だった。  
標準よりも小さい赤子で驚いたことを覚えている。

抱いた時、大きく零れそうな黒眼でじいーとこちらを見つめていた。  
泣く訳でもなく、ただ見つめられていた。  
最初、赤子と抵抗があつたが、すぐに吹き飛ばされ可愛れに負けた  
のだ。

(近くでみると、ますます美形だ )

「お嬢様、あーん」  
「お嬢様、オムツ変えましょうね～」  
「お嬢様、ねんねの時間です」  
「お嬢様、…」

「はあ…」(甘かつた)

その後、どうでもいい羞恥心と戦ひしならうとは、あの時ひつとも考えていなかった。  
最悪だ。

私は、お嬢様が可愛くて仕方なかつた。

私は、ドンの娘として羞恥心と戦つた。

## お嬢様について その6

11年前

フォボスとティモスに会つたのは、雨の日の庭だった。

田本だつたら、わたしは小学生入学を迎えていた頃だ。

「ぴちぴち、ちやぱちやぱ らんりんらん」

「お嬢、屋敷に戻りましょ」

「やだ」

「お嬢～、柊に怒られるの、ワシなんですよ～」

「やだ」

渡は、護衛の為どこまでもついて来る。  
丁度、それにイラついていた頃の話だ。

まあ、この屋敷には柊、渡、私の3人のみしか存在しない。  
柊は、メイドを追い出してしまったから、家のこと忙しい。  
まるで、執事の1とく働いているし、もっぱら屋敷内は渡と行動した。

護衛なんて意味なしと思っていた。

「あつ、かたつむり！」

「いいえ、お嬢、かたつむりです」

「むへ、間違えた」

「ハハハ」

「笑った、渡ーー！」

「ハイハイ、帰りますよー」

「わた…っ」

「覚悟ーーー！」

わたしは、その後泥濘にはまつて転んでしまつて見えなかつた。

「お嬢ーーー！」

見えたのは、赤い血が水溜まりに流れて雨に色をつけていたこと位だ。

それから、大きな音が聞こえたことだ。  
耳がぐわんぐわんしていた。

どこかで鳥の鳴き声のようなものが響いた。

「お嬢、振り向くな……」

「う、うん」

「大丈夫か」

「「あんちやー…」

「こ、や、お嬢は悪く…」

「うん、鳥さん死んじやつた」

「いや、お嬢、死んだのは鳥じゃないくて刺客なんだが…」

渡に抱きあげられながら、私は1メートル程先の木の下を指差した。

「鷹…か？」

「たか？」

「ああ、子供がいるみたいだな」

「……（どうしよう、やつてしまつた。私のせいだ）…」

子供がいたのに、親鳥を殺めてしまった。

「おー、お嬢動くな

わたしは、渡から無理やり離れて、終のもとへ駆け出していた。

あれから、鷹の飼い方とかで忙しくてすっかり忘れていたが、確かに狙われてたのは私だった。

神経図太く出来てんなーと今思つと感じる。あれは、あの後どうなったんだろう…。

あんまり、考えるの止そつ。  
私の心の平和のためだ。

「痛い、フォボス、あげるから、突かないでつ」  
赤眼のフォボスは、私から餌をほしがつた。  
ディモスは我関せずといった風貌だ。  
鷹にも人格？いや鷹格が存在するらしい。  
金眼のディモスは、クールだ。

「お嬢さん、そろそろ屋敷に着きますよ

「うん」

「二人は、ワジが預かっておくとするか

「うん、お願い。適当に遊ばせといって」

「終は、先に行っているはずです。表からお入り下さい」と  
そう言って、渡は車の扉を開けた。  
腕を差し出す。

「ええ、わかりました」

着物の裾を寄せて、私は立ち上がった。

「こつ来ても、馬鹿でかい城のようだわ

私は、車から降りマフィアの娘として屋敷に踏み出す。

## お嬢様について その7

お嬢様が、そろそろ本宅の表玄関に参られる頃だ。

私は、腕時計で時間を確認する。

「よつ、格

そう声をかけて来たのは、昔からの知り合いのアウルムだった。彼の父は、金の管理を司っているフ武神の一人だ。アウルム自身、その役職を継ぐ立場にいる。今では、補佐官として権力を誇示している。

「今日も、愛しのバンビのお迎えか?」

「はい、そろそろですので」

そう答えると呆れた顔をしてこう答えた。

「ホントに『執心だな』

「ええ、ヒノ工お嬢様は、とても愛らしく可愛らしい方です」

「その『執心』なバンビの容貌は、ファミリーの中でも限られた人間しか見たことがない深窓のお嬢様、だからなあ。俺には、ビニが可愛らしいのかさっぱりだな」

「当たり前です！」

別宅に囮つ程大事にドンはお育てになつたのですから、アウルムに姿を見せるなどありえません。

それを抜きにしても、この男は危険だ。グレーの髪を靡かせて、歩くときはエロそのもの。

巷では、色っぽいなどといつ言葉で括られて終了だが、この男は口が回る。

金を管理して、街の商売の斡旋やカジノの支配人だ。当たり前だが、やることが汚い。

お嬢様には、毒だ！――！

「おこ、ロヒ出しだるわ」

「どうあえず、忙しいので後にしてトセー」

私は、足早にそこを後にした。  
アウルムの言葉は響かなかつた。

「なんで、深窓のお嬢様がここに召集されるんだらうねえ

「イノリ、ヒノエがここに来るって本当?」

「ええ、そう聞いててよ」

豪華な一室で2人の金髪美女がくつろいでいた。

一人は、ソファーに身を預け、爪いじりに夢中だ。  
波うつ金髪に、すらりとした身体。眼の色は青く、肌色は健康的。  
赤いワンピースを身につけ黒いヒール。  
ただ、組み替えた太もものスカートの中には、拳銃のフォルダーが  
納められている。

「ダンパパの誕生日会依頼よね」

「ええ、そう記憶しているわ」

もう一人は、長い脚を強調した黒いパンツに、ファーのついたチュニック。波打つ金髪に違ひはなかつたが、肩越しですっきりまとめ

られていた。

メイドが入れたお茶に口を付け、爪いじりに夢中な姉に続けざま口を言った。

「あの子、ちよつとは身長伸びたのかしら？」

「たかが半年で伸びてたら強勒でしょう」

そう答えた美女はの瞳は切れ長で吊り上っている。まさに、ドンの娘といった風貌をしていた。

「まあそつかも」

少しばかり、眼を細め焼き菓子を口に入れた。

「ミノア、あの子からかつの好きよな」

「えへ、だつて小動物にしか見えないし」

「まあ、否定しないけど。程々にしないと従者に睨まれるよ」

「あへ、終。あいつホント邪魔」

「ふふ、まあ違わないケド。ドンナは出席拒否だつて。なんでも、コレと旅行らし～」

「ふーん、ダンパパ、よく怒らないね」

「さあ?」

一人は、じつ見えてまだ22歳に23歳。

「あつ、はみ出た…」

ヒノエお嬢様のお姉さま達は、マフィアの娘らしい風貌だ。

## お嬢様について その8

ドンの誕生日 当田

「終、なんで私の身長は伸びないのかな？」

お嬢様は、東の国に伝わる着物を着つけながら鏡を見ていた。本日のお召し物は、黒い生地に大きな椿があしらわれている。

白椿といつりしい。

ドンからヒノ工お嬢様へと頼まれたのだ。

ドンは、いつもヒノ工お嬢様には着物を着せる。

私も従者になつてから着つけを学ばされた。

東の国から職人を呼び寄せ、さらにヒノ工お嬢様には何人か専門的な教師がついた。

この別宅の別棟に屋敷があり、そこで何人が雇い入れているのだ。

「よいではないですか。お嬢様にとてもお似合いです

「そういう問題なんですか？」

「ええ、イノリセキ、ミノアセキにそのような装いをしててもお似合いにはなりません」

「ええ、まあ、否定はしないけど……、私もドン血が流れてるなら少しは伸びてもいいと思つただけど……」

バレルファミリーのドン ダン・ハリウェル・バレル

この島の名を受け継ぎ、古くからこの土地を納めている家系だ。

身長はおよそ196センチ。

深い縁の眼を宿した男で、髪の色は深い茶を宿している。

私は、赤子の頃から指で数える程度しか顔を合わせてていなかつた。だから、ドンと呼んでいて、父としてはあまりに認識が薄い。

（大体、あんなイケメンを父に持つなんて信じられないし。私は、母親に似てる設定なのか、自分の容姿と比べるとかなり疑うよ）

「お嬢様？」

柊は、手を止めた私を不思議に思ったのか、こちらを振り向く。

「何でもありません。柊、髪を結つてくれませんか？」

「はい、ただいま」

柊は手慣れたもので、この腰より先にある髪を手早く結いあげ始めた。

「ヒノエお嬢様、ご機嫌麗しゅう。柏木…」

「山根…」

「日下部でござります」

「先生方々、すみません。おいで頂いてありがとうございます。」

柏木・山根・日下部の3人は私の家庭教師だ。  
東の国出身。

日本と似た国なのか、この国は日本語だ。

柏木は、華道茶道着つけなど動作などの先生だ。

山根は、武道・日本語・算術などを教わっていた。

日下部においては、三味線・舞・笛などだ。

3人も女性という事には驚きだつた。

何でも母の知り合いらしいので、遊郭の出らしい。  
なので、どう見ても艶めかしいの一言に反応する。

この人たちが、現れてから私はいとこのお嬢様の習いごとじやんかと呆れたものだが、ドンの教育は徹底しているなあなどと他人事だつた。

それと同時にイイのかマフィアなのにと思つたりもしたが、なし崩しどはこういう事を言うのだ。

その後は、かなりしんどいの一言だつたが、良い機会だから頑張つた。

(それなりに形になつてればいいけど…まあ)

「すみません、本日はゾンの誕生会に出席することになりました。  
つきましては、今日の課題を先送りにして頂きたいのです」

「かしこました」

「お気をつけで」

「私たちは、御前を失礼させて頂きます」

「お嬢様、参りましょっ」

「ええ、終」

わたしは、これでもマフィアの末娘だ。

## お嬢様について その9

「アウルム、聞いたか？」

「あん？…なんだお前か」

グレーの髪が揺れ、同色の眉が上がる。

アウルムは、中庭で葉巻を吸っていた。

真っ青に晴れている空に凸凹く煙りが立ち上がっていた。

「アルマか、何の用だ」

「何の用ついで、今日の会合の事だ。聞いているだろ、ドンかい

「だから、何だ」

「なんだって、ヒノ工お嬢も出席らしいじゃないか」  
そう少し声を荒げて答えた男は、ダークバイオレットの短い髪を揺らしていた。

ただ、彼より少し身長は低いせいだからだろうか、それとも別影響か、年齢はアウルムより少し若いように見える。

「武器屋の息子が、『ひやけやひやけや』

「それは、関係ないだろ！…第一、俺の仕事は船の警備だ！」

「息子に違ひねーだろ」

「まあ、やつだけどな～…」

「てめーは、まだ親父と喧嘩してんのか…、馬鹿か」

「つるさこなー…、それより、」

「はいはい、柊が迎えに行つたよ」

「へへ、やっぱりホントなんだなあ」

「ドンからの命令だ。欠席する訳ないだらうよ。そんなこともわからんねえのか、お前今年いくつだ？」

イライラしながら、アウルムは葉巻の火を消した。

「26」

「ふん、わかつてんなら、似合つよひてんじろー…」

「一つしかかわらないだろー」

口を尖らせ、両手をパンツスースのポケットに入れる。

「年齢はな。…ああ、身長もな」

「そつちは、関係ないだろーー」

「ハーッハッハッハッハッハッ」

そう笑つて去つて行つた。

「ちえ～…」

アルマ・プロセス、26歳

武器の管理を司る父を持っているプロセス家の一男。

身長はおよそ188センチ。

兄と姉は、父の管理化のある部署で働いていたが、彼は船の警備の部署に所属している。

「おい、アルマ、どうしたんだ?」

同僚が反対側の廊下からやつてきていた。

「いや、何でもねー」

暗い廊下を一人歩いている男はつぶやく。

「はあ、何があるんだか…」

アウルム・スカルピニー、27歳。  
金を管理する部署のナンバー2。  
身長およそ192センチ。

「ピー、ビーーツ」

「わっ、突くな、フオボス」

2匹の鷹を連れた男が反対側から歩いてくる。

1匹は好戦的、1匹は我感ぜず。

別の気配に気付いたのか、もう一人も羽をばたつかせた。

「ディモス?」

「鷹、か…」

いい歳の男が2匹を連れている。

「え、ええ、」

「誰のもんだ」

「ヒノ工お嬢様の物です。渡です。」  
渡は、2匹を抑えてそう答えた。

「渡、お嬢様の護衛か」

「はい」

「手間を取らせた」

「いえ、失礼いたします」

רְאֵבָנָה

「二人とも、静かにしろ！」

まるで、つむることでも言っている様だ。

2匹はお嬢様の鷹である

## お嬢様について その一〇

グレーの髪の男を背に2匹と1人は廊下を突き進む。  
「全く、お前たちはピーピーウルセー鷹だな～」

「ピ」「ビイ」

「イタツ、そう言えば、あの時もそうだったな」

「フオボス、威嚇しちゃダメ!!ドンだよ。偉い人なんだから」

「ピ、ギビィーー」

羽をばたつかせて、ドンを睨みつける。

「ふふ、ダンパパ、鷹に威嚇されてるし」

「ふつ、ミノア、笑つたら失礼よ」

「はーい」

2人の姉はどこ吹く風だ。  
相変わらず、淒みのある美女だ。

(いいボディしてるよな~)

威嚇されている当の本人は、何を考えているかよく分らなかつた。  
無表情。

(美丈夫の無表情は、本当に怖い。何考へてるんだろ?、この人。  
怒つてたりして)

「も、申し訳ありません。きちんと言い聞かせます。ドンの誕生日  
パーティに呼んで頂いたのに」

わたしは、着物の裾を握り小さな緊張を強いられていた。

「かまわん。お前が主だ。それより、どうだ?  
椅子から立ち上がり、こちらへやつてくる。

「どう、とは?」

「あら、キモノのことよ。ダンパパが選んだのよ。」

「そうそう、すつぐ———い悩んでたし。ダンパパは

間髪入れずに話ってきて、2人も私との間を詰めてきて、周りを囲む。

美女・美丈夫に囲まれて私は極度の緊張状態だった。

この親子は、普通の美女・美丈夫とは違つて、妙な威圧感があるので毎回辛かつた。

さすがは、マフィアのドンとその娘だ。

（助けて、柊、渡：）

従者と護衛は、扉の前で控えている。

「相変わらず、ちつといねえ、ヒノエは」  
そう言つてミノアは着物に触れる。

「そうね、姿勢も幼いし、今年は17よね。何がいいかしら？」

「それより、ソレの着心地はどうだ」「イノリの話を遮つて、ドンは感想を聞きたがる。

「とてもいいです。ありがとうございます。」

力チン、力チンの私を差し置いて3人は何か揉めているようだった。  
近くにいると未だ上手く話せない私は、内容を聞いていられる程余裕がない。

その頃、扉前

「おお、お嬢が完全に囮まれて何も見えん」

「口を慎みなさい、渡」

「だけどよつ、かわいそつじやないのか、アレ」

「ですが、父親ですよ。フア//コーのドンです。ビリにもなつません」

「だけど、困つてゐるお嬢を助けんのが従者の仕事じやないんか」

「へつ」

「あーあー、かわいそつ。お嬢は超絶に緊張してこる」

「わかつてますよ。行けばいいんでしょ」

「おー、さすが終。お嬢の一の従者」

「ペーー」「ビィー」

鷹はそんな二人を視界に入れていった。

「ですから、ダンパパは威圧的なんですよ。ただでさえ無口、無表情」

「そうそう、40センチ以上も身長差あって、その顔！！」

「…お前たちはうるさい。私の誕生日だ。少しほ黙つていろ」

「あら、嫉妬？」

親子の言い合いは続く。  
私の緊張も続く。

(その腰と太もものにある拳銃を握つて話すのは、ヤメテ)

今日は、ヒノエお嬢様の父、マフィアのドンの内輪のお祝い日である。

## お嬢様について そのーー（前書き）

お嬢様誕生の経緯について  
小さな番外編へ

## お嬢様について その1-1

東の国、遊郭

藤は、以前何と自分が呼ばれていたのか知らなかつた。父も母も東の国では、異端と呼ばれる小さな種族だったと言つ。彼女は小さなその身に、種族の血を濃く受け継いでいた。東の国では、こう呼ばれている。

邪の血

戦乱の中その血を持つものは利用され殺され、世が一端の落ち着きを取り戻す頃には、もうすでに耐える寸前だつた。

貿易が盛んな街の遊郭の最奥一室に彼女は存在していた。人買いに売られ、ここへやってきていくつもの月日が経つていた。艶めかしい西洋薔薇をあしらつた着物を身につけている。流れた黒い濡れた髪が美しかつた。

「藤、髪を結つておくれ」

そう彼女を呼んだのは、今仕えている蓮太夫。

「他の奴らはどうしたの？」  
「他の処へお使いに、それからお参りに出ています」「そうかい…、お前旦那たちには知られてはいないね」「はい、大丈夫です」

「ならない、その力は隠しておかなくてはならない。私がこの地位を得てから探し始め見つけ出したのは、お前を含め4人」

「姉さんは、大丈夫ですか？」

「ええ、いつも通りだよ。」

「ですけど、今日はお休みになられた方が…」

「今日は、大事な盟約の日なんだよ」

「めいやく？」

「ああ、私たちの種族にとつて大事なことを

「？」

藤は要領を得なかつたが、蓮太夫は唯一信用に足る人物。彼女が言つているのだ、そうするべきだと思った。

瞼を静かに閉じた太夫は、口を開いた。

「お前たち4人は、今日来る男に着いてお行きなさい。藤、お前はこの血を受け継ぐ者を産むんだ。もちろん、あの子たちの中にもいずれ成すものもいるだろう。だが、そなたが産む子は少し違う。強き力を持ち、隠れ生きて来た我らの血とは違った人生を歩もう。この一族の血は、藤、お前にかかる。この地にいては、いづれ閉ざされてしまう。お前の命は、もうすでに終幕に近づいていると言つてもよい。子を成し、緩やかな終焉を」

蓮太夫は、先見の力を持つていた。

邪の血を引き継ぐ子には、皆皆人と違う力を持ち生まれる。力には、個々の差は存在したが、戦乱の世には重宝されし力だった。

「姉さん…」

以前、藤には、家族がなかつた。  
そして希望もなかつた。

それを作ったのが、蓮太夫だ。

「いいかい、守るんだ。必ずだ」

「……」

藤は、口を開けようとすると出来ない。

扇を開き、小さく扇いで窓の外へと蓮太夫は視線を変え、重ねて藤に解いた。

「藤、……私の名はなんというか知っている者はすでにいない」

「えつ」

「私は、丙（（ひのえ））と呼ばれていた。もう呼ぶものはいない。覚えておいで」

「……はい」

蓮太夫のつづらと弧を描いた口元は、とても美しかった。

「バーン、着いたな。」

「ええ、随分掛かりました。」

港には、一際大きい船が到着し一時の賑わいを見せていた。  
それもそのはず、出てきた男たちは随分大きい身体をしていたのだ。

「とりあえず、交渉は終わらせて、息抜きとする  
「はい、ドンの通りに」

藤は、この時すでに先の運命に決意を固めていた。

マフィアの娘の誕生はもつ少し先の話になる。



## お嬢様について その1-2

バレル島、ドンの私室

わたしは、その扉の前にいた。

「お嬢様、ドンがお待ちですよ」  
終はやわしく笑って私を即した。

「はー」

扉を息を殺し叩く。

「ヒノエです。しつれいします」  
そう言って扉を開いた。

「遅い」

「す、すみません」

ドンは、椅子の上で脚を組み座っていた。

(今日は一人だ。よかつたあー。ああ、ホント集まると思ひしきアミコーだから…)

「おいで」  
「ドン、久しぶりです」  
「ああ、久しいな。息災か?」  
「はー」  
「もうか、ならよご。……やはつ心配だな…はあ」

「？？…急にどうしたのですか？」

「…ああ、急な話ではないんだ。お前が生まれた時から決まっていたことだ。これはな」

「決まつてた？」

「ああ、俺が支えてやる事が出来ればいいが、私は藤と契約した人間だからな」

「母上とですか？」

「ああ」

そう呟いて頬を撫でてくれたが、いつもより元気が無によつに感じる。

「ドン？」

（美形が悲しむと超へカッ「い！」、憂いありまくつだ。スゲー）

「いや、余命までしばらくなれる、ゆっくりしてこるとこー」

「？…ここですか？」

「ああ。少し様があつてな。ここ空けるが、ゆっくりするといこー」

「はい」

ドンはそう言つてここを出て行つた。

入れ違いに、いい紅茶の匂いと共にドンが傍にやつてくる。

「ドン、行つてしましました。終、なんか変じゃなかつた？」

「変とは？」

「うーん、なんかいつもより迫力がありませんでした」

「迫力ですか？」

「うん」

「ヒノ工お嬢様の前ではいつもあまり迫力はありませんよ、ドンは」

「そつかな？」

「そうです」

何やり終は、満足そうに笑みを浮かべて言つ。今日まだやらいいお茶が入れられたらし。

「藤、約束は守るよ

ヒノエお嬢様は、ドンに愛されている末娘である。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9203z/>

---

有り得ない世界にわたし

2011年12月31日22時54分発行